研 究 領 域 名	共創的コミュニケーションのための言語進化学
領 域 代 表 者	岡ノ谷　一夫（東京大学・大学院総合文化研究科・教授）
研　究　期　間	平成２９年度～平成３３年度
研究領域の概要	本領域は二つの目的をもつ。まず、言語の起源と進化について、言語理論・生物進化・人類進化・個体発生の研究成果に整合するシナリオを作ると共に、その妥当性を数理モデルやシミュレーション、ロボット実装により構成論的に検討する。次に、そのシナリオにもとづきコミュニケーションの未来と人類の存続のあり方を提言する。言語は人類が個人を超えた知を結集し文明を作ることを可能にした画期的なテクノロジーである。現在人類は、言語と情報技術を基盤とした新しいコミュニケーションを創出しようとしている段階にある。言語の起源と進化を知ることで、未来のコミュニケーションのあり方をデザインできると私たちは考える。グローバル化によって生ずる国際的軋轢、情報利用の格差によって生ずる幸福格差、急激に変化するコミュニケーション様式への適応障害等、現在起こっている問題の解法を提言すると共に、人間性の本質と可能性について理解を深化させる。
科学研究費補助金審査部会における所見	本研究領域は、言語の起源と進化について、二大言語理論（生成文法と認知言語学）の対立関係を超克し、独自の「共創的コミュニケーション理論」の提案を目指す、国内外に例を見ない独創性を有した提案である。言語の起源と進化の解明は、ヒトの進化に関して単一の側面の解明をするだけのものではなく、人間存在の全体、ヒトの社会性の全体、現代社会のありかたの理解にも大きく貢献する広範囲の影響をもたらす重要な研究課題である。そのため、従来の言語学の研究者と、人類進化学、行動生物学、認知発達学、創発的構成論といった、周辺で重要な意味を持つ多くの学問分野を統合し、言語というヒト固有の形質の出現の総合的な理解を必要としている。本領域代表者はこれらの諸側面を理解した上での統合を可能にする日本で数少ない研究者でもある。また、人類進化と言語能力の個体発生の解明をもとに、現代の SNS などの IT 社会における行く末を見据えているのは、視野が広いと評価できる。 各計画研究組織は、3 層構造となっており、各計画研究の成果をどのように位置づけ、全体の成果につなげていくのかの道筋が明確になっている。また、国際的連携も十分図れると期待できる。 深層学習に代表される AI では代行できない人間の本質（創造性）に取り組むことは積極的に評価できるが、他方で、一部の計画研究は本研究領域が目的としている共創的コミュニケーションにどのように寄与するのか明確でないため、より具体的に連携強化を行う必要がある。